

## (7) 人権教育研究会

会 長 山崎 源生 (県立中村中)  
副会長 陸野 高俊 (中 筋 小)  
事務局 濱口 格 (具 同 小)

### 1. 研究主題 「人権教育における授業の創造」

### 2. 研究経過

| 実施年月日           | 研究のあらまし                                                                                             | 会場                | 備考    |
|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------|-------|
| 令和4年<br>5月6日(金) | 四万十市教育研究会 組織総会<br>内容：役員選出、研究主題設定、年間計画                                                               | 四万十市立<br>中村中学校    | 11名参加 |
| 8月5日(金)         | 四万十市教育研究会 夏季研修会<br>○研修〈講演会〉<br>・演題「子どもたちのための部落差別問題学習をめざして<br>～差別の現状から～」<br>・講師 川崎 健太郎さん (NPO法人はらから) | 四万十市立<br>具同小学校    | 11名参加 |
| 8月25日(木)        | 第63回幡多地区人権教育研究大会への参加<br>(参加可能な会員)                                                                   | 黒潮町ふるさと<br>総合センター | ※大会中止 |

### 3. 活動内容

夏季研修会〈8月5日(金)〉

研修〈講演会〉

- ・演題「子どもたちのための部落差別問題学習をめざして ～差別の現状から～」
- ・講師 川崎 健太郎さん (NPO法人はらから)

#### (1) 差別の現状について

- 2016年12月9日、「部落差別の解消に関する法律」が成立。16日に公布・施行
- 罰則のない理念法だが、「部落差別は存在する」とし、解消に向けて取り組むと国が示したことは大きな意味がある
- この法制定の背景には、インターネット上での差別や人権侵害の増加がある

#### (2) 法務省の実態調査より

- 明らかになった部落差別の実態、そこから見える忌避意識、その存在
  - 黒潮町、その他の地域の意識調査
  - 「部落差別」で今、起きていること
    - ・結婚就職差別
    - ・土地差別
    - ・インターネットによる差別のバラマキ
    - ・無知、無理解、無関心な層の増加
- } 当事者の不安につながっている

#### (3) 子どもたちのための部落問題学習をめざして

- 教員が「学習させた」と思っている、児童生徒が「学習した」と受け止めていない実態
- 県民の意識調査より (2017)
  - 6歳から12歳未満で同和問題を知ったという割合は、40歳代の65.5%に対し、10歳代は11.8%と低い

① 部落差別の現実を知る

○部落差別の問題を「いま」としてとらえる

- ・正しい知識
- ・当事者との出会い
- ・具体的な差別の実態を知る

② 差別をどう乗り越えていくのかを考える

○差別は見ようとしなければ、見えない

- ・差別があるのは「される人」がいるからではなく、「する人」がいるから
- ・差別とどう「たたかう」のか？
- ・差別そのものを徹底的に否定する人権感覚

③ 本音で語れる「なかま」をつくる

- ・差別（いじめ、いろいろな人権侵害）によって孤立したとき、誰かに伝えられることが大切（一人で苦しまない。「なかま」の存在）
- ・「伝えてもらえる」自分になるには（理解や共感の大切さ）
- ・「立場」や「ちがひ」をこえたつながり（多様性や相互理解、「みんなちがって、みんないり」）

○差別を無くすために

- ・差別と向き合い、行動できる
- ・仲間とつながり、差別を乗り越える



(4) 人権教育から人権文化を

○これまでの先人たちが同和教育で積み重ねてきたことを改めて考える

- ・差別の現実から深く学ぶとは？ 誰が学ぶのか？

○子どもたちが抱える課題も多様化する中で、これまでの積み重ねをどのように活かしているか活かしているか

- ・同和教育から人権教育への転換の中で

○いかなる差別も絶対に許さないという「文化」を、教育をとおしてつくっていく

- ・だれのためではなく、自分のために

人権学習において、自分との関わりが見えてこない、どれだけ学んでも他人事になってしまう。自分はなぜ人権について学ぶのか。学びをどう活かしていくのか。人権学習は自分の生き方を問いつづける学びでなければいけない。

#### 4. 今年度の成果と課題

○今年度は、「同和問題に関することを学びたい。」という会員の希望により、実際に解放子ども会で子どもたちともかかわりの深い川崎さんを招いて学習した。意識調査から見える差別の現状や、ここ20年近くが明らかに部落差別問題の意識、認識が低下している現状の話があった。教壇に立つ私たちは、今一度、自分たちの実践を振り返り、人との出会いを大切にしながら、正しい知識を身に付けるための教育を行う必要があると感じた。

○学級経営の基盤となる人権教育を、年代層関係なく、多くの方と学び合える場の設定が必要だと思われる。

○人権教育研究会は、以前より、研究授業を通して互いに学ぶことを大切にしてきた。しかし、ここ数年、会員数の減少等により、研究授業が難しくなってきた。歴史学習の中でどのように部落差別問題を学習したらよいか悩んでいるという声を聞くこともあり、授業を通しての研修会が行えるよう模索したい。